

草庵仏教

第231号
(発行日)

2009年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

虚言と生活不安

煩惱はいろいろな行いや言葉に現れて出てくる。

だいぶ以前の寒い冬のある日の午後、朝のお参りに疲れて、午後こたつの中で気持ちよくうたた寝をしていた。すると突然電話がなった。門徒さんからの電話だった。「お参りはまだでしょうか。午後二時とのことでしたが」と言う。はっと時計を見るともう三時。ああ大変だ。しまった忘れていたとあわて、「すみません。お参りが忙しくて遅れています」、なんて言って、急いで法衣に着がえ、必至で自転車をこいで飛んでいったのを覚えている。祥月命日のお参りを午後二時に約束をしていたのを、うっかり忘れてのんびりとこたつで寝ていたのである。それなのに「済みません。忘れてまして」と言えずに、とっさに「忙しくて遅れています」なんて虚言を言う始末であった。自分を正

当化する我が身をはじたが、大なり小なりこうした自己正当化をはかりやすい。まさにおぼろかしいことである。

なかなか自分の弱みとか失敗とかお粗末さなどを人に知られたくないという煩惱がついてまわる。このように自分を正当化し、自分を守ろうとする心は、私どもの人生活にくつついていようように思

人に軽蔑されたり、ダメ人間とレッテルを貼られたり、能力の乏しい者と評価されたり、あるいは粗悪な人間だと人に思われるのを恐れるのは、自己評価を下げたくないという単なる見栄からだけではなく、生活不安にも根ざしていると思う。

なぜなら世間的あるいは社会的評価が低くなると、就職や仕事にも直接影響を受ける。仕事が減るとか、会社での地位が低くおさえられるとか、そういうことにもつながってくるので、当然、生活問

題にも関わってくる。「リストラされて食うていけなくなるかもしれない」という不安にまで関係してくるのである。

そういう他者からの評価が悪くなるのを怖れるのを仏教では悪名畏といい、五怖畏の中の一つである。

五怖畏とは凡夫にある五つの怖れのこと、悪名畏の他に不活畏(生活不安)・死畏(死ぬ怖れ)・悪道畏(死んで悪道へ落ちる怖れ)・大衆威徳畏(自信なく大勢の人前に出る怖れ)などがある。

この中、不活畏は「食えなくなったらおしまい」という生存が脅かされる不安であり、死畏も「死んだらどうしよう」という不安であるが、それと悪名畏はつながっているように思われる。

自分の安全をまもり、自己正当化を計ることと利害損得が絡むと、いつわりを言いやすくなる。「ウソをつく」、(外をかざる)のは、どこまでも生き延びたい、死にたくないという凡夫の生の欲望に根ざしていると思われる。

聖人は、むなしく、いつわ

《秋季彼岸法要》

9月22日(火)

午後2時始まり

り、かざり、へつらうところのみ、つねにして、まことなるころなきみなりとするべしとなり」と仰せられ、「いつわり、かざり、へつらうのみつねにして」と煩惱具足の凡夫の姿を示しておられる。

そうすると、しばしば私たちは他者を「あの人はうそつき」と言うが、自分のなかに同じ悪がちゃんとある。

自己を正当化したばかりの煩惱具足の者がどうして「いつわり」なく生きることができようか。痛ましいことである。

であれば「私はウソが多い人間です」と自分を認めることが凡夫の私における(せめてもの本当)ではなからうか。

れどもすでに流転の因である
迷いの根が無くなったという
大きな意義があるのだと教え
てくださるのですね」

D 「ええ、聖人は信心をいた
だいたということは

往相の一心を發起するがゆえ
に、生として当に受くべき生
なし。趣としてまた到るべき
趣なし。すでに六趣・四生、
因亡じ果滅す。

と仰せられ、生死流転の因が
滅したことになる、それゆえ
この一生が終わると、もはや
あらたに迷いの生を受けるこ
とはなく、大涅槃に至り、迷
いの果が尽き果てるのである
と仰せられています」

G 「では、ここで愚痴とい
うのは」

D 「それは私たちが日頃言っ
ているような愚痴という意味
ではなく、生死流転の因であ
る無明（迷い）のことであり
ます。ですから信心の智慧を
いただいたことは、道理とし
て愚痴を離れたことだから無
明が破れたことなのだと聖人
は仰せられ、ちようど闇夜が
明けて朝の暁になったような
ものだとも仰せられています
」

G 「なぜ暁といわれるので
すか」

D 「それは無明の闇は破られ
たけれども、まだ永き迷いの
闇の影響が残っていて、完全
に煩惱が無くなったわけでは
ない。完全に無明の余臭が無
くなって光明ばかりになるの
は浄土に生まれたときなので
あって、この世にいて身体を
もっているかぎり無明の影響
をまだまだ受けざるを得ない
のです。たとえば、喫煙室に
入るとタバコは吸わなくて
も、タバコの臭いがきついな
うなものです。しかし、阿弥
陀仏の光明にであって、光明
が届いているから、真つ暗闇
ではなくて闇がやつと晴れは
じめた、それはちようど朝の
あけがたいわば暁になったよ
うなものだと教えてくださる
のです」

G 「たとえ信心をいただいで
も、死ぬまで煩惱は無くなら
ないということですね」

D 「ええ、この煩惱の身が終
わるときに、信心の智慧（因）
が仏の覚りの智慧（果）とし
て開花するとお聞きしていま
す。ですから信心は仏に成る
因だといわれるのです」

G 「そうすると智慧光は、本
願のみ言葉となり、それを聞
く私たちに信心の智慧となっ
て与えられ、無明の闇を破り、

ついには仏に成らしてくださ
るのですね」

D 「ええ、そうですね」

G 「聖人は信心のことを（信
心の智慧）とよく仰せくださ
っています。信心の智慧は
私たちの人生活の上で、ど
のような働きとして受けとれ
ばいいのでしょうか」

D 「智慧とはものごとを見る
心の眼といえましょう。人生
のあらゆるものごとを見る根
本的な眼ですね。その眼の真
実なのを仏の智慧といい、そ
の心の眼がつぶれているのを
迷妄というのでしょうか」

G 「迷妄とはどういう状態な
のでしょうか」

D 「一番分かりやすいのは、
自我を自分だと思い、身体を
その自分の物と執している、
そういう認識のありようだと
いつていいのではないでしょ
うか」

G 「自我が自分だと錯覚して
いるのですね」

D 「彼でもなく、あなたでも
ない、（この私が）（この私を）
とつね日頃言っている自我意
識の他に（私自身）を知らな
い状態ですね」

G 「それが愚痴の状態ですね。
では智慧の眼で見るとどうな

るのでしょうか」

D 「自我は私の主体ではなく
て、阿弥陀仏の働きあるいは
阿弥陀仏の心が私の主（ある
じ）と知らされるのです。そ
れまでは自我が私の主だった
のが、阿弥陀仏が主と知らさ
れ、自我は主人公の座を弥陀
仏にゆずるといふことが起こ
り始める、それが信心をいた
だいたということではないで
しょうか」

G 「そうすると阿弥陀仏が私
の眞実主体だといふのです
ね」

D 「そういつても間違いでは
ないと思います。阿弥陀仏が
私にであってくださって、私
に離れなくなるといふのが信
心の経験です。それは阿弥陀
仏が私において主となり始め
るので、阿弥陀仏が私
の眞実主体、いつてみれば眞
実の自己といえるのでありま
しょう」

G 「自我しか知らなかった者
が初めて眞実の自己を知るの
ですね」

D 「ええ、阿弥陀仏が私の眞
実主体に成られるといふこと
は、眞実の自己を与えてくだ
さるといつても間違いではな
いでしょう。そう理解すると
信心とは何かが、現代の私た

ちには分かりやすいと思いま
す」

G 「すると、信心をいただく
ことは自己をいただくことな
のですね」

D 「ええ、自我の私は客の立
場になり、眞実の自己が主と
なる、いやなり始めるといえ
ましょう」

G 「（始める）といわれるの
は」

D 「やつと阿弥陀仏が私の主
であるということがほんの少
し分かりかけてきた、という
のであって、まだまだ強固な
自我の思いに振り回されがち
だということですよ」

G 「では自我は無くならない
のですね」

D 「この世に生きる間は自我
はなくならずませんし、自我は
しばしば猛威をふるいます。
それが煩惱熾盛といわれるの
ですよ」

G 「では自我はまったく必要
ないのですか」

D 「いいえ、自我はこの世を
生きる機能という面をもって
いますから、自我が無くては
この世での生活はできません。
自我と自己のお話はいず
れまたいたしましょう」

信心夜話

歎せず、さまざまな苦難を受容させていただけける智慧を南無阿彌陀仏にたまわ

ゴチツクの字が松並さんの言葉。

*

○二人の息子が、一人は傘屋、一人は草履屋。母親は雨降れば泣き、お天気なれば泣く。これでは一代、泣き暮しをせねばならぬ。お天気になれば、草履屋の息子を喜び、雨降れば、傘屋の息子を喜ぶとなれば、何時でも喜べる。

子供は雨降れば雨と遊び、雪降れば雪を楽しむ。日々の風にゆられ、日々の波にまかせて、南無阿彌陀仏、これ好日。

（今与えられてくる現実を喜ぶか、有難く感じるか、苦しむか、嘆くか、それは現実を見る心の眼のいかんによる。信心とは現実を見る眼ともいえる。それは自分にとって困ることを、転じて善いことと受けとらせて下さる智慧ともなりたもう。人生生活の諸相を見る眼となつてくださるのが信心の智慧。智慧によつて、苦はあれどもやわらぎ、悲しみは慰められる。智慧がなければこの世での幸いすら喜べず当たり前になる。雨に遊び、雪を楽しむという、いわば難儀を喜ぶといわれるのですが、そうまではいただけないと

ても、心弱き者も雨や雪を嘆かず、悲歎せず、さまざまな苦難を受容させていただけける智慧を南無阿彌陀仏にたまわ

○南無阿彌陀仏 窓腰まどこしによりそ添そいなが
らこの声を聞いていたら「お前に相談もせず、お前の助かる南無阿彌陀仏に成ったぞや、いやでもあろうがこの度だけは、この弥陀にめんじて、助けさせてくれよ」と、阿彌陀様がこんな私に、両手をついて、頭を下げて頼んでござる御姿御声が、今この口に現れ給う南無阿彌陀仏であります。そうすると、念仏するとかせねばならぬと言う事に離れて、南無阿彌陀仏と聞くばかり。念仏するまま、させられているま

まが聞いている。
（汝を助ける仏仕事をさせてくれよ、さもなければ仏になれぬから、と頭を下げてまします姿が今、口に現れたもう南無阿彌陀仏なのでしたか。阿彌陀様の方から私に手を合わせてお願いなさるとは、南無阿彌陀仏）

○ある念仏者、大和へお越し下さいまして「私の信心はこれでよろしいかと。私にご苦勞なし下さった事は、お

聞かせ頂いていますが、私が永の修行した覚えはない。それでよいやら存じません。これでよいのかと念を押すのは、あなたが押すのでない。仏様が私に「念を押」してござる。それが証拠に重誓偈に「重ねて念を押してある」。阿彌陀様が「念を押して」ござったら、あなたがあらためて念を押す必要はないではありませんか。

（私が助かるかどうかは阿彌陀様に聞く。私の往生が確かかどうかを私の心や私の判断の上に確かめても決着はつかない。阿彌陀様が、〈若し生まれずば〉、〈若し生まれずば〉と、重ねて誓つて、念をおしてくださった。仏の誓いが私の助かる確かな証拠）
（了）

《住職雑感》

先祖供養の法要をしたからといって、災難が来ないわけではない。だからたたりやバチを怖れ、災難不幸が来ませんようにと願って先祖供養をしてお経を読んでもらっても災難

よけの保証にはならない。法要することは大いに結構であるが厄除けや招福のためにするのはなく、南無阿彌陀仏をいただくために法要をするのである。南無阿彌陀仏をいただくば災難不幸が来ないのでなく、災難不幸が無くなるのである。南無阿彌陀仏をいただくとは仏の智慧をいただくことであり、智慧をいただくとはものごとの見方が転換することである。それは〈災難不幸〉としか見るこ

とが出来ない見方が転じて、すべてが真実まことにあう大事なご縁であるという見方に転じることである。そうするといわゆる〈災難不幸〉は消えるのであって、この人生は、木村無相さんがおっしゃるように〈ご縁、ご縁、みなご縁、南無阿彌陀仏にあらうご縁〉である。南無阿彌陀仏をいただければ、阿彌陀仏や諸仏に護られ、恵まれ、導かれていることが実感されてくる。しかも単に〈そう考える〉とか

〈そのように見方を変えようとする〉までもなく、直接に感じられるものである。大きな現世利益を直接に感じるのである。これが有難い、あれが有難いというような、特別な現世利益ではなくて、人生生活全体が護られ、導かれているという大きな現世の利益を実感するのである。

〈先祖供養をしてご利益をいただきたい〉ために法要をするのではなく、法要をいとなむのは自分が南無阿彌陀仏をいただくばかりか、縁のある人々に南無阿彌陀仏をお与えするために行なうのである。だから法要には子や孫などの若い人が出席するのは非常に望ましいことである。子や孫に南無阿彌陀仏の種が植えられていくからである。
（了）

《真宗法話会》

10月2日(金)

午後3時始まり

講師・藤浪 龍師

(座談会はありません)